

論文の内容の要旨

論文題目 アルフォンシーナ・ストルニの詩の道程
 ——モデルニスモから前衛、アンティソネットの創造へ——

**The Path of Alfonsina Storni's Poetry:
From Modernismo to Avant-garde and the Creation of Antisoneto**

氏 名 駒井 睦子

アルゼンチンの女性の詩人アルフォンシーナ・ストルニは、伝記的な批評、ニュークリティシズム、フェミニズム批評など、さまざまな観点から研究されてきている。その中で、ストルニの詩がその生涯に渡って変化し続けていたこと——特に後期作品において劇的な変化をとげたこと——は、多くの先行研究で指摘されているが、そうした変化が何によってもたらされたかについては十分に議論されてこなかった。さらに、初期から後期に至る創作の全過程に目を配り、詩が生み出された背景まで深く踏み込んでその変遷を追った研究もなされていない。

20世紀初めのアルゼンチンの詩はどのような状況にあり、ストルニはなぜ批判され、その批判にどう応えたのか。その詩の変化の背景には何があったのか。そして詩人は最後に出版した詩集において独創的な詩形「アンティソネット」を生み出すことになるが、それは彼女にとってどのようなものであり、その独創性とは一体何だろうか。本論文はこれまでの研究からは抜け落ちていたこの点に注目し、ストルニの詩の変化を初期作品から晩年の作品まで丹念に追いつつ、書かれた時期のアルゼンチンの文学的状況を明らかにし、同時代の他の詩人たちと比較した。

本研究は、ストルニの詩作品を同時代の文学状況というコンテキストの中に置きなおし、他の詩人たちの作品と比較検討すると同時に、ストルニの詩以外の作品も対象にし、詩の読解に役立てた。この研究によって、ストルニの詩の創作の全行程だけではなく、同時代の周辺諸国を含むアルゼンチンの文学界における詩壇の状況を見渡すことが可能になった。また、彼女の作品を幅広くとらえることにより、その独創性をより明確にした。更に本研究を通じて、詩人が様々な詩の中で繰り返し用いたイメージをあぶりだし、ストルニの深層の意識の中で、その創作の変遷が意味するところを明らかにした。

本論文は、次のように構成されている。

序章

第1章 最初の詩集における模索——白鳥・貧しい人々・「雌狼」——

第2章 前期作品における語りの特徴と変化

——同時代のラテンアメリカの女性 詩人たちと比較して——

第3章 中期作品とブエノスアイレスの前衛運動

第4章 後期作品と前衛文学運動の関係——『七つの井戸の世界』を中心に——

第5章 アンティソネットの創造

結論

【各章の概要】

まず序章では、詩人の生涯について概観した。次に先行研究史をたどりながら、ストルニの詩の研究において見過ごされてきた点を明らかにし、本論文の意義を明らかにした。

第1章において彼女の最初の詩集『バラの木の不安』を取り上げ、それ以前からラテンアメリカで絶大な力を持っていた文学運動モデルニスモの影響について検討した。ストルニはモデルニスモの巨匠ルベン・ダリオの影響を受けている。2人の作品を詳細に比較することにより、彼女の詩作の出発点は、純粹芸術の追及を目指したモデルニスモにあったことがわかった。

しかし、ストルニが最も関心を持ち、この詩集の多くの作品で取り上げたのは、実は貧しい女性や子供の不幸な状況であった。そのことは、作品に用いられている強い感情表現の中に読み取ることができる。しかしストルニは、彼らの抱える社会的な問題に関心を持ち続けながらも、そののちは女性の「私」の心情を表現した作品を多く書くようになった。「雌狼」という詩において女性の一人称の語りの創作に成功したストルニは、2冊目以降の詩集において同じスタイルの詩を発展させていくのである。一方、社会的な主題は、新聞や雑誌のコラムや短編小説で扱うようになる。彼女は詩と散文、それぞれで扱う主題を書き分け始めたのである。第1章の最後に、ストルニが書いた散文であるジャーナリスティックなコラムと短編小説を取り上げ、そこで扱われた主題と、ストルニが読者を惹きつけるために用いた語りのレトリックについての考察を行った。

第2章では、ストルニの詩作の前期と言われている時期に出版された3冊の詩集について扱い、この時代の作品の特徴や変遷、その独創性について検討した。前期のストルニは女性の「私」が心の内を語る作品を多く書いているため、本章ではストルニと同じように女性の主体を語り手とする詩を書き、ラテンアメリカで活躍した3人の女性の詩人を取り上げて比較することとした。まず、ストルニより早くから詩を発表し脚光を浴びた、ウルグアイの詩人デルミラ・アグスティーニの作品を扱った。ストルニはアグスティーニを尊敬しており、同じタイトルの詩を書いているが、ストルニの作品には女性の屈折した心情がより濃厚に描写されている。

次にストルニと同時代に活動した、ウルグアイのフアナ・デ・イバルブルーの作品との比較を試みた。詩中の女性の「私」が愛の喜びや浮き立つ心を語る時、2人の女性詩人の作品は似た傾向を持つ。しかし、不幸や苦しみについては、ストルニの作品の方がさまざまな心のあやや、繊

細な心のうつろいをより具体的に伝える。

続いてチリのガブリエラ・ミストラルの詩との比較を行った。まず、ストルニの3冊目の詩集に描かれる、詩中の女性の語り手に着目した。それぞれの作品には、繊細で揺れる女性の心情が見出され、その揺らぎは語りのトーンやリズム、語調などの詩法によって表現されている。一方、ミストラルに関しては、初めての詩集を比較の対象としたが、他の女性詩人と比べて恋愛詩は非常に少ない。ミストラルがこの時期に最も感情をこめて扱った主題は、子供、そして母性である。作品の傾向は全く異なる2人だが、詩を介して心を通じ合わせていた。

この分析により、ストルニが書いたような男性優位社会に向けた批判的な意見を直接的に述べた作品は、他の3人の女性詩人たちの手からは生まれなかったことがわかる。男性優位社会の在り方に異を唱え、のちにフェミニズム詩として評価されるようになるストルニの作品は、当時は他に類を見ないものであったのだ。だがストルニの独創性はフェミニズム詩をこの時代に書いたということだけでなく、女性の「私」の様々な感情を細やかに表現した、その多彩な作品の数々にあることも本章で明らかにした。

第3章では、ストルニの詩作の中期と呼ばれる1925年と1926年に着目し、当時の文学運動のコンテキストの中で彼女の作品を検討した。少し前からアルゼンチンでは、スペインで起こったウルトライスマと呼ばれる前衛文学運動が大きな影響力を持っていた。ストルニのこの時期の作品には前衛的な傾向はないが、1925年に発表した5冊目の詩集『黄土』には、これまでとは異なる女性の語り手が現れ、独自の変化が詩におきたことがわかる。

詩人は翌年1926年に、恋愛を主題とした作品を収めた唯一の散文詩集『愛の詩集』を発表する。本論文では、この詩集がストルニの創作の転換点となる重要な作品集であると再評価した。実在と非実在の境界が曖昧な幻想的な愛の世界に、ストルニの独創性を見出すことができる。

第4章では、ストルニの作品に最も大きな変化が生じた時期について扱った。創作の後期においてストルニが前衛運動の影響を受けていることはこれまでの研究で指摘されてきたが、その前衛運動は何かということ、詩集以外の場で発表された作品も含めて分析しながら検討した。

また、この時期になぜその詩作に変化が生じたのか、ストルニが書いた戯曲の上演の失敗にその要因を探った。この失敗の後、ストルニが1927年と1928年に発表した詩作品には、詩中の「私」が外界から攻撃されているものが幾つもあるうえ、都会は冷たく非人間的な存在とみなされている。この時から徐々に、ストルニは以前のような女性の「私」の心情を表現する作品から離れていき、性別が明示されない「私」を語り手にすると同時に、自由形式の詩を書くようになった。

1934年に出版された『七つの井戸の世界』には、「海」や「都会」というテーマごとにセクションが設けられ、自由形式の詩が収録されているが、最後のセクションは「ソネット」と命名され、タイトル通り伝統的詩形であるソネット形式の作品のみで構成されている。本論文では詩集内の区分に沿って、無題のセクションを含む4つのセクションの作品をそれぞれ分析した。この詩集における海は、ストルニの前・中期のものと異なり、生と死の境界が曖昧な異空間とみなされている。一方都会は、冷たく非人間的な空間として扱われている。

この第4章では更に、1930年代のアルゼンチン文壇の動きとストルニの詩との関連を探った。本論文では「1930年世代」を名乗る詩人たちが編んだアンソロジーを検討し、ウルトライスモの名残が見られる彼らの作品と、ストルニが描いた都会を主題にした詩との間に共通性を見出した。

第5章では1938年刊行の彼女の最後の詩集『デスマスクとクローバー』を主に扱っている。ストルニは脚韻を踏まない11音節のソネットにアンティソネットという名を与え、最後の詩集の作品を全てこの形式で書いている。アンティソネットは隠喩が多く用いられた、かつてないほど難解な作品である。詩人はそのことを自覚しており、ウルグアイで行われた講演会でアンティソネットの創作過程を明らかにしながら朗読を行った。本章ではこの講演録に沿って作品の分析を試みた。作品に扱われた題材は多様であるが、多くの場合詩人が外で目にした風景と内面世界が混ざり合って生まれたものである。ストルニは46年の生涯を通してさまざまな詩のスタイルに挑戦してきたが、最後に最も自信の持てる作品を創作したという手ごたえを感じていたようである。本論文では、ストルニ創作期間における作品の変化を論じ、彼女が最後に到達したアンティソネットが、詩人にとってどのようなものであったのかを考察した。